

## 保育における相互作用の意義

舟 木 哲 朗（島根大教育）

3年間の研究をとおして考えさせることが多かったが、そのなかでも、とくに重要と考えられたことは次の諸点である。

1. 父・母・幼稚園教諭の三者間に、教育意識の大きいずれがあること。

そして、松江市の場合は、予想に反して身体的および知的な教育について、父母に消極的な者が多かったこと。

なお、昭和55年度の報告書では省略したが、ひとりひとりの幼児の父母（つまり夫婦）ごとに比較を試みたところ、意識の一致しないものが多かった。

これは大きい問題であって、意識の一致を図るための対策が望まれる。

2. 教育の役割分担について、父母と幼稚園教諭との間に意識のずれがあること。

しかも、父母は幼稚園に対して多くを望み、幼稚園教諭は家庭に多くを望んでいて、幼稚園でも家庭でも自分の領分ではないと考えている

教育の分野がかなり存在していること。

これもまた大きい問題であって、このままでは教育の空白を生ずるから、両者の連絡を密にして分担と協力の態勢を作ることが望まれる。

3. 家庭不和や、教育についての家庭内意見不一致が問題の子どもを作りやすいこと。

また、父親に自信がない（もしくは家族から無視されている）家庭が問題の子どもを作りやすいこと。

問題をもつ子どもの親に、このようなことについての認識が少いので、家庭に対する啓蒙を必要とする。

最初にこの研究を計画した意図は、父・母・幼稚園教諭の三者間に教育意識のずれがあれば問題の子どもを作るかもしれないし、もしそうだとすれば、問題を防止する対策を講じなければならないということであった。

結果は予想したとおりであった。

今後の問題は、問題防止のための具体的な対策を樹立することである。